HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	参加記
Author(s)	桜間, 瑛
Description	北海道中央ユーラシア研究会 第100回記念大会. 第2部. ISBN: 9784938637736
Relation	中央ユーラシア研究を拓く: 北海道中央ユーラシア研究会第100回記念. 北海道中央ユーラシア研究会編
Citation	スラブ・ユーラシア研究報告集, 5, 206-207
Issue Date	2012-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51960
Type	other
File Information	SEP5_011.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道中央ユーラシア研究会　第 100 回記念大会　第 2 部

＜参加記＞

第 2 部では、まず当研究会を主宰する宇山智彦氏が、研究会のこれまでの経緯を振り返った上で、日本における中央ユーラシア研究の歩みと今後の展望を語った。

研究会については、東京での大学院生有志による「中央アジア研究会」設立から、札幌への移動と活動の拡大を振り返った。それと重ねるように、日本の中央ユーラシア研究全体の変遷も概観された。特に、ここ 20 年の間に研究者間の連携が進み、標準的な概説書や事典の編纂がなされ、国際的な交流・共同研究が進展したことを成果として挙げた。また日本の研究動向の特徴として、現地語資料の重視や研究対象のバランスの良さを挙げ、世界的にも評価できるとした。一方で、今後の研究の継続について、いくつかの課題も言及された。まずこの地域においては、文学を始めとする文化研究が手薄な分野となっていることが挙げられた。また、モンゴルやチベットといった周辺地域の研究者との連携の深化、国際的な発信の強化の必要性を指摘した。さらに、若手の困難な就職状況も踏まえ、各人がより幅広い研究関心を持つと共に、実務との連携を推進し、現状分析の社会的発信などによって、中央ユーラシア地域とその研究の魅力をより積極的に宣伝することが必要とされた。

これに引き続き、3 名のコメンテーターがそれぞれの観点から、中央ユーラシア地域研究の今後について語った。小松久男氏は、第 1 部も含めた各報告についての講評を行った後、今後の中央ユーラシア地域研究のベースになりうるものとして、現在所属している東京外国語大学に中央アジア地域を専門とする学科が設立されたことに触れた。風戸真理氏は、自身の研究者経歴を振り返りつつ、当研究会のような場の重要性に触れた。すなわち、京都大学のアフリカ人類学研究の土壌で教育を受ける中で、当研究会のような形で、同じ地域を専門とする研究者が集まり、議論をする場があったことは非常に有益であり、これからもこうした会が続いていくことが望ましいと語った。地田徹朗氏は、自身が参加した総合地球環境学研究所での研究プロジェクトを取り上げつつ、文理融合の形も含めた共同研究の有効性を訴えた。そして、各研究者は中央ユーラシア研究で生き残るために、自身の研究のコアの部分は保ちつつ、世間のニーズに合わせた課題にも取り組むことが必要ではないかと提案された。

その後フロアに開かれた議論の中では、ここで挙げられた問題は、中東など他地域に関する地域研究にも共通して当てはまると指摘された。そして各地域の研究者が、それぞれの地域への関心を高める方法や、今後の地域研究の発展について話し合う場を設けてもいいのではないかと提案された。中央ユーラシア地域については、シルクロード等への強い

関心が以前よりあり、それに応えることで、さらに中央ユーラシア地域研究への関心も高めることができるのではないかという指摘があった。そのためにも、文化研究にも力を注ぎ、ヴィジュアル資料の充実や詩などの翻訳を進めることが有効ではないかという意見も出た。また当研究会については、近年、古代・中世史についての報告が非常に少なくなっており、その点で偏りがあるという指摘もあった。一方で、近年は文化人類学的研究など、以前はあまり見られなかった研究領域の報告が増えているという評価も挙がった。その他、研究会での報告内容が専門的になりすぎ、敷居が高くなっているという指摘もあり、専門的な研究を進める一方で、専門が異なる人びとも議論に参加できるような報告の工夫が求められた。

中央ユーラシア研究のここ数年だけを見ても、日本の中央ユーラシア研究の進展は目覚しい。本大会では、それを評価しつつも、これからを見据えると多くの課題が残されていることも明らかとなった。諸々挙げられた中でも、これまでの研究成果が専門分野外、あるいは学問以外の社会にまで還元され、さらなる関心を惹起しているとは言い難いというのが一つの共通した認識であったように思われる。今後は当研究会としても、また自身も、アカデミックな世界にとどまらない交流を持ちつつ、研究経験・成果の積極的な発信が必要だと感じさせられた。

【記：桜間瑛（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程）】